

大会を盛り上げる地域サポーター制度 ～ハンドボールの聖地を目指して 富山県氷見市～

スポーツにおける「聖地」とは高校野球の甲子園、ラグビーの花園に代表されるように選手の憧れや思い出となっているものである。「聖地」には全国から人が集まり、新しい交流が生まれる。富山県氷見市では、毎年、中学生が参加するハンドボール大会としては国内最大規模の「春の全国中学生ハンドボール選手権大会」を開催し、「ハンドボールの聖地」を目指すとともに、全国から集まってくる選手・指導者・保護者と地域住民との交流を図り、地域活性化に取り組んでいる。

1. 氷見市の概要

氷見市は富山県の北西部、能登半島の東側つけ根部分に位置し、人口5万5千人のまちである。荘厳な立山連峰に象徴されるように自然豊かであり、加えて日本海有数の水揚げ量を誇る氷見漁港や、市内各地で温泉が湧き出ており「能登半島国定公園・氷見温泉郷」の名で知られている。

アクセスは、富山空港（上海、大連、ソウル、ウラジオストクの国際線含む）、JR 氷見駅、能越自動車道氷見ICがある。

2. 大会概要

- (1) 大会名：春の全国中学生ハンドボール選手権大会
- (2) 主催：(財) 日本ハンドボール協会
共催：氷見市 氷見市教育委員会
(公財) 氷見市体育協会
- (3) 発足：平成17年度（小中高校生が参加する全国大会を継続的に開催しようとする市町村・スポーツ団体の取り組みを支援する（財）地域活性化センターの「スポーツ拠点づくり推進事業」としてスタート）
- (4) 会場：氷見市ふれあいスポーツセンター他
- (5) 日程：毎年3月末 5日間

- (6) 参加：男子48 女子48 合計96チーム
約1400人が参加
都道府県各1チーム。開催地代表として氷見市代表チームが参加。

3. 競技種目の説明

ハンドボールとは、基本的に屋内で行われる競技で、40m×20mのコートに1チーム7人ずつの2チームで行い、高さ2m×幅3mの相手ゴールにボールを投げ入れて、より多く得点したチームが勝ちとなるシンプルな競技である。ジャンプシュートに代表されるようにダイナミックでスピーディーな試合展開が魅力となっており、本場ヨーロッパではサッカーに次ぐ人気を誇る国もある。

日本でも、2008北京、2012ロンドンの各オリンピック予選が注目され、以前に比べメディアを始め各方面でハンドボールが取り上げられている。財団法人日本ハンドボール協会の登録者数は約11万5千人（平成24年3月末現在）であり、「がんばれハンドボール20万人会」の下さらなる登録者数の拡大を目指している。



4. 大会の特徴

「ハンドボールの聖地」

氷見市は昭和33年に第13回国民体育大会のハンドボール会場となり、昭和36年には全国高等学校ハンドボール選手権大会（現在のインターハイ）が開催されたことを契機として、ハンドボールが市民のスポーツとして浸透している。小学校のスポーツ少年団からハンドボールに親しみ、地元の小・中・高校とも全国大会での優勝経験を持つなど競技レベルも高い。また、これまでハンドボールの全国大会を数多く開催している。ハンドボールをキーワードとして、これまで全国大会等で培ってきた競技運営のノウハウを活かして、新しい全国大会を継続的に実施。「ハンドボールの聖地」を目指すとともに、大会を契機として地域活性化を図ることを目的として、財団法人地域活性化センターのスポーツ拠点づくり推進事業に応募した。



「聖地を目指す」

大会期間中総勢約6,000人が訪れるという本大会の出場チームは中学1、2年生によるチーム編成で、各県から男女1チームずつが参加する。学校単位の部活の枠を超え、クラブチームも参加する全国大会であり、世代最強チームを決する大会である。加えてメイン会場の氷見市ふれあいスポーツセンターの約1,500人収容の観客スタンドは満員となり、「聖地」にふさわしい熱気と雰囲気満ちている。そんな最高の舞台が用意された氷見市を選手やコーチは毎年目指し、保護者も応援に駆け付ける。

大会はトーナメント方式により進められるので、早々

に敗退してしまったチームも当然ある。ここにも、本大会の工夫が見られる。その敗退チーム同士の交流試合の企画、会場の確保である。負けたチームとはいえ各県代表同士の対戦は減多にない機会であると同時に選手のレベルアップに直結する。また、1日でも長く氷見市に滞在してもらうことにも繋がっている。

「住民参加型の大会運営」

遠くから氷見市に来てくれる中学生や引率者たちに、住民一人ひとりができる範囲で「おもてなし」をし、全国大会出場という経験以上に、参加選手と保護者に「特別な思い出」をつくってほしい。同時に氷見市をPRし、全国に氷見市のファンを作ることができたら・・・という発想によって生まれたのが「応援サポーター制度」だ。これは、茨城県のチームなら阿尾地区が、新潟県チームなら朝日丘地区が・・・と、各チームに対するサポート担当地区を固定するものだ。毎年同じ地区がサポートすることにより、地区の住民もその都道府県に愛着を覚えるようになる。

第一のサポートは、観客スタンドを埋め尽くす盛大な応援だ。自治会などでつくった横断幕や応援ジャンパー、手づくりの鳴り物を持って、時には仕事を休んでも駆け付ける。チームが勝ち上がれば、応援はさらに盛り上がり、チームの保護者と一体になって声援を送る。



各地区の住民たちは、それぞれ独自の「おもてなし」も企画している。ある地区は特産の氷見牛を使ったゲン担ぎの「ビーフカツカレー」を振る舞った。また、南国の県を担当する地区は10トンのダンブ6台分の雪を会場近くまで運び雪遊びを体験してもらったり。出場記念に特産

の「稲積梅」の記念植樹をする地区もある。一方、試合に集中したい選手を気遣い、勝ち残っている間は応援以外のサポートが過剰にならないように配慮する地区もあり、年々サポーターも成長しているようだ。

独自のサポート以外にも、引率者や保護者の送迎、飲み物などの買い出し、練習会場として提供された地区の小学校体育館の清掃などがある。

「大会を支える協働」

5日間の大会や、その準備に要する費用はおよそ3,000万円。財政の厳しさは氷見市も例外ではない。どのようにして大会を育てているのか。

氷見市農協は、減反政策をきっかけに、米からハトムギへの転作を実施し、ハトムギ茶の製造販売に乗り出した。そして、ハトムギ茶のペットボトルが1本売れるごとに5円をこの大会に寄付している。3年目の大会の時は250万円を大会に寄付した。

大会期間中にまちの至る所で見掛ける幟にも仕掛けが。幟は市内の個人や企業に購入してもらっているのだ。当初「幟などつくって買ってもらう時代ではない」という意見もあった。しかし、大会実行委員会が住民に呼びかけると、「一生懸命やっているから」と、あちこちでまとめ買いや個人注文があった。企業が購入した幟は、大会実行委員会が会場付近に立てる。個人の幟は持ち帰ってもらい、翌年度以降は自宅付近で立ててもらう。幟で得た収入は約100万円を超え貴重な財源となっている。

「便利なホームページ」

本大会のホームページはまさに「春中ハンドのポータルサイト」となっており、選手の登録から宿泊やお弁当の申し込みまで、参加申し込みにおける全ての書式がダウンロード可能となっている。

大会期間中は、トーナメント表の更新や結果速報の閲覧が可能である。また、携帯電話専用の結果速報QRコードも掲載されており、外出先でも結果を知ることができる。

試合を観戦できない人のために、試合の様子を生中継（一部録画対応あり）し、ホームページ上に動画をアップしている。また、地元のケーブルテレビでも生中継しており、道の駅氷見フィッシャーマンズワーフに設置の

TVでも放映されており立ち止まって観戦する人もいる。

「成功の鍵は」

第一におもてなしの心だ。氷見市を知ってもらうチャンスと捉え住民、企業及び行政がおもてなしの精神で大会を盛り上げたことだ。また、市民の「おもてなしの心」が具体的な行動に移せるよう「応援サポーター」というしくみをつくったことが大きい。

ホームページ上にアップされている動画を見ると、アマチュアの、しかも中学生のスポーツ大会とは思えないほどの応援に氷見市のおもてなしの心を感じる。また、会場内で大漁鍋を無料で振舞っているが選手たちには好評のようだ。

第二に協働の力である。宿泊やお弁当の手配をポータルサイトから一括管理したり、地元食材を使用したお弁当の開発、ケーブルテレビの試合中継、地元有志を始めとした個人や企業まで協力した資金調達等、どれを取っても協働抜きでは実現し得ないことだ。

そして最後にスポーツを核としたまちづくりという発想である。その土地に代表される自然や食材だけがまちづくりの核になるのではない、氷見市にとってハンドボールも同様に核であったのだ。また、スポーツを「やる」という視点だけでなく「応援する」という視点でとらえることで、地域住民の参加・連携につながっている。

このレポートは、関係者へのヒアリング、資料提供等を受け、（公財）えひめ地域政策研究センターにおいて取りまとめました。
